【郷土史への扉】

囲みの文化

一　広場の文化

人類が誕生して一説では二百万年以上の歳月が経ったといわれていますが、どの時期の人類社会においても共通するものがありました。

それは、「囲みの文化」です。言い変えれば、広場であり、焚き火や囲炉裏などを囲んで人々がコミュニケーションを図る場所の存在です。

縄文時代のムラは、広場を囲むように竪穴式住居が配置されていました。これは、①広場に火を焚くことで猛獣からムラを守る②それぞれの住居を最短の距離で結ぶことができる③広場を交流の場（日常生活や儀式、祀りなどを含む）として活用できる、といった理由から広場を中心としたムラ構造が発達してきたと思われます。

広場の文化は、洋の東西や時代に関係なく存在しています。特に、中世のヨーロッパは広場（教会）を中心としたまちづくりが盛んに行われました。現在もヨーロッパの都市は広場を中心に発達しています。

二　日本の広場の文化

一方、日本では広場の概念はなく、広場の替わりに「道路」がその役目を果たしてきました。

道路といえば、現代では自動車が通るところというイメージが強いですが、本来は人々が行き来する場所であり、コミュニケーションの場所でもありました。

司馬遼太郎著書の「功名が辻」は、土佐藩主となった山内一豊と妻の千代が夫婦協力して出世する物語ですが、タイトル名となっているように、功名は戦場にあるのだけでなく、町の辻にも功名がある。つまり、道端での人々の世間話の中に、世の中の理や先見の明、すなわち出世へのヒントがあるということが描かれています。

また「井戸端会議」という言葉があるように、日本では共同井戸や町の中の広場がコミュニケーションの場となりました。

三　「町」の意味

日本には、道路がコミュニケーションの場であるという文字があります。

「町」という文字です。

町の意味は、辞典で調べてみますと「市や区などの中の小さな区画とか人家が多く立ち並ぶ地域」と書かれています。

町は、漢字の中に「田」の文字が入っていることから、水田を区切っている地域と考えられがちですが、「田」は水田のことではなく、十字に交差している道路を囲んだ地域という意味で、道路がコミュニケーションの場であることを表しているのです。現在の住居表示は道路を境にして分けていますが、昔は道路の対面は同じ町内となっていました。

四　囲炉裏の効果

家族間のコミュニケーションの形態も「囲みの文化」が備わっていました。

縄文時代や弥生時代の竪穴式住居を見てみますと、住居の中心部に炉があって、人々は炉を囲むように生活を営んでいました。

この炉を囲む形態は、日本の伝統住宅の中にも「囲炉裏」という形で最近まで続いてきました。囲炉裏は、①暖をとる②料理をする③煙が虫を駆除する④湿度の高い日本において煙が藁葺き屋根などを長持ちさせる、といった利点がありますが、最大の効果は、家族が囲炉裏を囲んで毎日コミュニケーションがとれ、団らんが図れる、ではないでしょうか。

後年、囲炉裏の代わりに登場してきたコタツにも同様の効果があると思われます。

国民的アニメとなっている「サザエさん」の中では、毎回のように家族がコタツを囲んで会話をする場面が登場しますが、このコタツを囲むことが家族団らんの秘訣であり、家族のちょっとした変化も見逃さない場なのではないでしょうか。

五　囲みの文化

このように、私たちは「囲みの文化」を保ちながら、社会や家族間でコミュニケーションを図ってきました。

しかし、今の日本の現状を見てみますと、語らいの場であった道路は車に取って代わり、住宅も個室を重点におき家族が集う空間が少なくなってきました。

このままでは、これまで日本人が囲みの文化を通して育んできた助け合いの心「結の精神」が薄れ、家族の結びつきも希薄になってくるように思われます。

「囲みの文化」の原点は、人々のコミュニケーションの場（空間）であり、その行動であります。空間が少なくなってきているのであれば、その分だけ行動を増やせばいいわけです。

まずは、今あなたの隣にいる人とのコミュニケーションから始めませんか。「おはよう！」「こんにちは！」という言葉から。

（文責：鈴）